

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2018年5月7日 発行

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井宣光

イエスは答えになった。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてある。(マタイによる福音書4:4)

学校の残響

学校のチャイムの音色が若干変わりました。機材入れ替えのためですが、放送部員からは「チャイムが変わって戸惑う生徒もいる。どうして変更したのか」と質問されました。これまでは、キンコンカーンという音の後に「ボーン、ボーン、ボーン」という「残響」のような音があったのですが、これが無くなり、3回目のボーンが完全にフェイドアウトするまで遅刻にならないという「ルール」も自然消滅ということに。確かに残響を極限まで抑えた無響室で音を聞くと違和感が残るようですが、慣れ親しんだチャイムの「残響」が消えてしまうと、妙な気分になるのでしょうか。

表題は講堂や音楽室の音響のことではなく、心にいつまでも残る母校での経験といったような意味で記しました。かつて担任をした卒業生が、子ども連れで母校に遊びに来てくれました。在校時代に何か頼み事をした私は、「ハイ」と答えたその生徒に次のように話したそうです。「〇〇(生徒の名前)は、ハイと返事しながらいつも嫌だなあという表情を見せるから、それを直しなさい。」今でもその言葉を思い起こすことがあるそうで、職場で嫌なことがあった時も夫婦喧嘩をした時にも、学生時代に先生に言われた顔になっているのだろうなと思い浮かべることがあります、と話してくれました。娘を松蔭に入学させた別の卒業生は、高校時代の聖書の授業で習った「人はパンだけで生きるものではない」の言葉を見ると、高校時代に思ったことと、今感じることは全然ちがうと話していました。冒頭の「マタイによる福音書」のこの部分は、荒野で断食をするイエスに悪魔が誘惑するシーンです。悪魔がイエスに、お腹がすいているのなら石をパンにしてみると言った時にイエスが答えた言葉ですが、ストーリー全体ではなく、その一節のみが残響のようにいつまでも心に残っているようでした。聖書の言葉を自らの心の内に置き、思い浮かぶ感情を味わってみる時、高校時代と、母となり40歳を迎えようとしている現在とでは抱く思いに違いがあるのは当然のことでしょう。学校生活のなかで経験する様々なエピソードは、いつまでも記憶の片隅で響き続けます。その種類が様々で数が多いほどに、そして年齢を重ねるほどに思いや感情に豊かさや深みを増幅させるのではないのでしょうか。

今春卒業した高3生の卒業記念文集に「目に見えない松蔭」と題して次の拙文を寄せました。

卒業生によると、仕事や子育てなど様々な場で出会う初対面の人と「私も松蔭なんです」と言葉を

交わすことがあるらしい。私を校長と知り、松蔭のつながりは他校と違って素晴らしいものがありますね、とお話し掛けいただくこともある。どちらの学校でも同窓生は同じ空気を共有した数年間があることで、何かしら連帯感を自然に持つようだが、松蔭の場合は特に強いように感じる。蔭に日向に漂う自由でのびのびとした空気が作り出すものなのか、千と勢会の集まりに感じる空気感は松蔭の教室や廊下で触れるそれとまったく同様だ。伝統的な松蔭のあり方を「オープンハート、オープンマインド」という合い言葉で表現しているが、その精神がなせる業なのかもしれない。卒業生は「目には見えない松蔭」を身にまとっているようだ。

礼拝でチャプレンが「目に見えないものを大切にすると話されたことがある。聖書には「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」(コリントの信徒への手紙Ⅱ4:18)という箇所があり、目に見えないものこそが大切であると説く。信念、愛情、信頼、約束、信用など人間が心に抱くものは、私たちが100年前の人間も時代を超えて同じものが存在し続けている。人間の存在を超えた何かが私たちの心に生き続けている。このように考えることは、自分本位の考え方を戒め、謙虚な姿勢で生きることにつながる。

仏教にも目に見えない心の動きを修業とする「無財の七施」という教えがある。「無財」とは「財」すなわちお金や財産がなくても、心ひとつでできる「施(ほどこし)」が7つある、ということだ。眼施(温かい眼差しおくる)、和顔施(笑顔で接する)、言辞施(優しい言葉、感謝の気持ちで言葉をかける)、身施(人のために体を動かす)、心施(心配りをする)、座施(席を譲る)、房舎施(場所や部屋をどうぞと提供する)の7つのことだが、毎朝、笑顔で温かい視線をもらえば、その日も一日がらんばろうという気持ちになる。「いつもありがとう」と言われて腹を立てる人はいない。駅のホームで障害のある方に「お手伝いをしましょうか」と声をかけたり、電車やバスで高齢の方や妊娠中の女性に「よろしければどうぞ」と席を譲るのは、慣れるまでは勇気がいるけれども、人にしてもらってうれしいこと、人にしてあげて感謝されることは、目には見えない心がけを行動に移すことで生まれるものだ。日々の暮らしのなかで自分の心と向き合いながら「施」を1つ2つと増やそうとする生き方は大切なことだ。「目には見えないもの」を形にあらわそうとする生き方を卒業生の皆さんにもお勧めしたい。これから皆さんが無意識に発する「目には見えない松蔭」は、「さすが松蔭」と賞讃されることもあれば、時に「やっぱり松蔭」と厳しく評されることがあるかもしれない。ただ、聖書の教えにせよ「無財の七施」にせよ、見えないものを大切にする生き方をしていくことで、「目には見えない松蔭」は確実に輝きを増すことだろう。卒業おめでとう。(2017年度松蔭高校卒業記念文集より)

学校は、生徒が自らの足で立ち、歩みをすすめ未来を切り開く姿勢を身につけることを願って教育活動を行い、今「目には見えない松蔭」が一人ひとりの生身の生徒の中に形作られています。卒業した後は一生、心身に染み付いた松蔭の残響が付いて回るわけです。教員自身の記憶に留まることすらない一挙手一投足でさえ、卒業生の人生の指針となる可能性があります。チャイム音の変更をきっかけに改めて気持ちを引き締めながら、生徒とともに日々の学校生活を送りたいと考えています。

(裏面へ続く)

文化祭は盛況のうちに（閉会礼拝のお話から）

「おもちゃ箱」をテーマに先月 28 日、文化祭を開催しました。家族や友人、学校見学の小学生とその保護者の方など 1298 名が来校されました。放送による閉会礼拝で私は次のように話しました。

文化祭のテーマ通りに舞台、教室展示、校内各所のアートが実に明るくて楽しそうで、各クラブそれぞれが工夫して表現をしていたように感じました。文化委員長の今津さんがパンフレットに今年のテーマについて次のように書いています。「今回の文化祭は、一人ひとりが好きなものであふれかえっています。しかし、そこには、一人ひとりが積み重ねて来た努力と目指してきたものがあり、それらはきっと同じ方向に向いていることでしょう。」私はこのメッセージを読んで、聖書の次の一節を思い浮かべました。

「からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。たとえ足が、『私は手ではないから、からだに属さない』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。たとえ耳が、『私は目ではないから、からだに属さない』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。もしからだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もしからだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょうか。器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで目が手に向かって『私はあなたを必要としない』と言うことはできないし、頭が足に向かって『私はあなたを必要としない』言うこともできません。（コリントの信徒への手紙 I 12:14~20）」

松蔭には 712 名の生徒がいてそれぞれ個性をもっています。文化祭では、712 種類のおもちゃがそれぞれ輝き、存在感を発揮し、そのことで松蔭全体が一つのまとまり、聖書のいう「一つのからだ」となっていたのだと感じています。今回の経験をもとに、各自が自分のやり方で自らを高めて成長させる努力を重ねていくなれば、それはとても素晴らしいことだし、いつも皆さんにお伝えしているように、生徒の皆さん一人ひとりのそのような姿勢が学校全体を良くしていくのだと、いつも確信をもって考えているわけです。（2018 年 4 月 28 日 文化祭閉会礼拝の放送より）

お礼状をいただきました！

お近くにお住まいの方から学校宛てお手紙をいただきました。4 月 6 日の本校の入学式の日ですが、王子動物園の駐車場でその方は自転車に乗っていて転倒してしまい、通りがかりの数名の松蔭生が介抱して救急車も呼んでくれたということでした。すぐに入院して治療を受け、手術もされたとのことで、4 月下旬に入り容態が落ち着いたのでしょうか、お礼状をいただいたのです。

「名前も学年も聞かず、お礼の一言も言えず、大変失礼をしてとても気に病んでいます。本当にありがたく、優しいお嬢様方に感謝しております。どうかお嬢様方にお礼と感謝の気持ちをお伝えくださいませんか？」

心のこもった感謝のお気持ちを届けていただきました。私からもその松蔭生の皆さんに感謝したいと思います。ありがとうございました。

大災害発生に心も物も備えて

毎年度の初め、緊急時や大災害の発生に備えた教職員対応マニュアルを確認しています。今年度のマニュアルには、Jアラート（全国瞬時警報システム）発令時についても定めましたが、先日の朝鮮半島での南北首脳会談の実現もあり、有事関連情報としての弾道ミサイル発射に伴う発令は当面はないようです。学校では先月、第 1 回めの避難訓練を実施しました。化学室での火災発生を想定した訓練でしたが、生徒には、登下校中や休日に家族と離れている際に大地震など大災害に遭遇した時、決してパニックを起こさずに対応する心構えをしておくように伝えています。校内には非常食と飲料水を保管し、校内のすべての清涼飲料水自販機も災害対応機としています。休日などに阪神淡路大震災レベルの大災害が発生した場合に備え、教職員を居住地単位に 4 ブロックに振り分けて集合場所を定め、各地域の生徒とご家族の安否確認をすみやかに行えるようにしています。またラジオ関西（AM 神戸 558MHz）からは学校からの連絡が放送されるようにしています。

政府の地震調査委員会が今年 2 月、南海トラフの巨大地震の今後 30 年以内の発生確率について、これまでの「70%」から「70%から 80%」に見直すことを発表しています。校内のすべての建物については耐震性を確認するとともに、必要な補強工事をすべて終えています。ご家庭でも家具の固定など防災・減災の措置と非常用食料備蓄のほか、最寄りの小学校など指定の緊急避難場所がどこになっているのかをお子様とのお話し合いいただき、万一の際にはご家族の集合場所をあらかじめ決めておくことなど、万全の備えをお願いいたします。

「保護者おしゃべり会」のご案内

悩み事のカウンセリング、というと少し大げさに感じてしまうものですが、カウンセラーとの 1 対 1 の予約制ではない形で保護者どうしがつながり、たがいに心を開いて思いを共有したり、相談したり、愚痴をこぼせる場をつくろう。学年の垣根を取り払い、子育てや家族についてざっくばらんにオープンハートで話そう、というのがこの会の趣旨です。昨年まで「土曜の～」と土曜を冠していましたが、今年度は土曜授業が始まったこともあり、平日を中心に開催したいと考えています。昨年は年間テーマを「親が知っておきたい子どもとのコミュニケーション方法」とし、毎回「子供に悩みを打ち明けられたとき」「自分の性格」「自分と家族の関係変化」などの個別テーマを決めて会をすすめました。学校側からは私とスクールカウンセラー、教員で教育心理の専門家が出席し、参加者数は多い時は十数名の時もあれば、3~4 名とこじんまりとした会もありました。

「話す」ことは、一人で抱えこんでいることをいったん自分から「離す」こと。わだかまりやこだわりから自分を「放す」ことといえます。皆様と共に学び、気づきを得ながら共に励ましあって日々の学校生活を作りたいと考えています。今年度第 1 回は下記のとおりです。後日、案内プリントを配布する予定です。 6 月 11 日（月）14:30~（1 時間~1 時間半程度の予定）

*今年の年間テーマ「日常がちょっと楽しくなるカウンセリングの考え方」

*お子様とご一緒に帰宅される場合、授業は 15:15 に終了しその後終礼です。中学アドバンスト塾は 16:45 まで、高 2・高 3 校内予備校の最終終了時刻は 17:55 となっています。